

留学経験がないタイ人日本語学習者の語用論的能力の分析⁽¹⁾

——断りメールの構成から——

Kulrumpa WORASRI

1. はじめに

電子メール（以下、メールとする）⁽²⁾は言語学の分野では、話し言葉と書き言葉の間にある「ハイブリッド」的性質という言語特徴がある（太田 2001）。従って、メールには特定の言語形式というメールらしさがある。日本の社会では、メールのやり取りは重要なコミュニケーション手段の一つであるため、日本語学習者は日本語でメールをやり取りする能力を身につける必要があると考えられる。メールを書く時、学習者は文法的な正しさのみならず、社会的要因にも配慮しなければならない。特に、相手の意向に添えない「断り」をメールで伝える場合は、友好的な関係を保ちながら、意思疎通を図るために高いレベルの語用論的能力を必要とする（Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz 1990）。中間言語語用論という分野に位置づけられる本研究では、日本語母語話者と留学経験がないタイ人日本語学習者を対象として、親しい先生・友達からの依頼に対する断りメール⁽³⁾の構成・意味公式及び、タイ人日本語学習者の語用論的能力に焦点を置いている。

2. 本研究の目的

本研究の目的は日本語母語話者とタイ人日本語学習者との間の断りメールの構成・意味公式における共通点と相違点を明らかにすることである。また、社会的な要因によって断り方の調整及び学習者が選択した言語形式という観点から、タイ人日本語学習者の語用論的能力を分析する。

3. 本研究の理論的な枠組み

3.1 中間言語語用論

中間言語語用論は第二言語習得と語用論⁽⁴⁾の2つの学問の領域に位置づけられている（Kasper 1997、清水 2009）。中間言語語用論では、中間言語の語用論的側面に焦点を当てるが、多くの学習者が「依頼」、「断り」などの発話行為⁽⁵⁾を行う際の語用論的能力を解明することに注目している（Kasper & Blum-Kulka 1993）。

3.2 語用論的能力

語用論的能力は Bachman&Palmer(1996)の分類と Leech(1983)・Thomas (1993)の分類がある。両者の観点は語用言語学と社会語用論⁽⁶⁾を区別する。ここでは、語用論的能力を語用言語学と社会語用論の2つの能力に分けず、意図的に伝えたい「断り」の言語形式と機能を効果的に用い、コミュニケーション場面で社会的な状況に応じた適切な言語使用として捉える。

4. 先行研究と語用論的能力の分析視点

4.1 中間言語語用論における断りの研究

4.1.1 語用的転移に焦点を置いた断りの研究

Beebe ら (1990)、生駒、志村 (1993)等は断りの談話完成テストを行い、学習者の言語形式を母語話者の言語形式と比較した上で、学習者の言語形式が目標言語にどれくらい近づいているかという観点及び、学習者の母語の干渉を受ける語用的転移に焦点を当てる。学習者の言語形式に語用的転移があると検証された。

4.1.2 学習者観に焦点を置いた研究

藤原 (2004)、藤浦 (2007)、ワラシー(2011)は、これまでの中間言語語用論の研究はあくまで学習者の母語が目標言語に影響を及ぼすという一方向からの視点であることを批判している。学習者の視点からの分析も必要と指摘している。従って、「語用的転移」のみならず、目標言語話者に近づけている「アコモデーション」、自らの母語とも目標言語とも異なる「学習者特有の言語形式」を分析対象とし、3つの言語形式が存在することを明らかにした。

4.2 学習者の語用論的能力の分析視点

本研究では2つの語用論的能力の分析視点を扱い、データを分析した。一つ目はタイ人日本語学習者が依頼者の社会的な地位による断り方の調整の仕方という語用論的能力である。二つ目は学習者の断りメールの構成・意味公式を分析した上で、上記の「語用的転移」「アコモデーション」「学習者特有の言語形式」という言語形式の分析枠組みを参考にし、学習者が選択した言語形式という視点から学習者の語用論的能力である。

5.研究方法

5.1 調査の概要

5.1.1 調査の対象⁽⁷⁾

- (1) 日本人大学生・大学院生 (以下、JJ とする) 15 名
- (2) 日本に長期的に留学した経験がなく、タイで日本語を専攻している 4 年生の日本語学習者⁽⁸⁾ (以下、日本語のデータは TJ とし、タイ語のデータは TT とする) 13 名

中間言語語用論に関する研究では、第二言語環境と外国語環境⁽⁹⁾を区別する。学習環境は学習者の語用論的能力に影響を与えと考えられる。本研究では、その要因をコントロールするため、外国語環境である長期的な留学経験がないグループのみに注目した。

5.1.2 調査方法

比較的親しい先生と友達⁽¹⁰⁾からの依頼メール⁽¹¹⁾を協力者のアドレスに送り、協力者がその依頼メールに対して断りメールを書いて、返信する。また、TJにタイ語のデータも書いてもらった。

5.1.3 分析方法

データの分析方法として、意味公式と断りメールの構成の分析を行う。

表1 本研究で扱う意味公式と断りメールの構成

全体的な断りメールの構成		構成の型		意味公式の種類	用例	意味公式の機能
開始部		宛名	A	宛名	鈴木先生 / 美華子ちゃん	宛先を表す
			B	挨拶の言葉	こんにちは／いつもお世話になります	礼儀、挨拶
			C	自己確認	文学部の〇〇(名前)	挨拶
	話題導入	積極型	D	連絡のお礼	ご連絡ありがとうございます	積極的な話題導入、関係維持・促進
			E1	肯定的な表現	大学祭、楽しみです	
			F	共感	準備とかで疲れてない?	
		中立型	G	話題の切り出し	よさこい踊りの件ですが	中立的な話題導入
			H	情報の確認	大学祭でよさこい踊りをされるんですね	
主要部	断りの前置き	積極型	I	願望	参加したかったのですが、	積極的な関係維持・促進
			E2	肯定的な表現	よさこいめっちゃおもしろそうやねんけど、	
			J	条件の提示	当日は空いているんですが、	
		謝罪型	K1	謝罪	申し訳ございませんが、	関係維持・促進
		残念型	L1	残念	大変残念なのですが、	
	理由	曖昧型	M	曖昧な理由	都合が付かない	理由・状況を説明する
		明確型	N	明確な理由	踊りの練習に参加することができません	明確に理由・状況を説明する
	断り	断り表現の前置き	K2	謝罪	申し訳ないのですが、	関係維持・促進
			L2	残念	せっかくなのですが、／大変残念なのですが、	関係維持・促進
		断り表現	O	明確な不可表現	よさこいに参加することができません。	明確に相手の意向に添えないことを表現する
			P	婉曲的な不可表現	参加は難しいと思います／できそうにない／できないと思います／見送らせていただきます	明確に相手の意向に添えないことを表現する、断りを和らげる
	断りの結び	積極型	Q	代案	知り合いに声をかけます／お手伝いできることがありましたら、連絡ください	積極的な関係維持・促進
			R	次の機会の要求	また、機会があればぜひ誘ってください	
			S	次回への意志表明	今度、やります	
		謝罪型	K3	謝罪	申し訳ございません／ごめんね	関係維持・促進
		残念型	L3	残念	残念です	関係維持・促進
終了部	終了時の挨拶	話題関連型	T	話題関連の挨拶	踊りの成功を祈っています	関係維持・促進
		一般型	U	一般的な挨拶	また、ご飯食べに行こう	関係維持・促進
		署名	V	署名	〇〇(名前)	送り手を表す

(1) 意味公式の種類と意味公式の機能

意味公式とは、用いられる表現の意味内容によって分類したものである。本研究は藤原(2004)と宮崎(2007)の意味公式を参考にして、得られた日本語とタイ語のデータを踏まえた上で、本研究の意味公式と意味公式の機能を設定した。

(2) 全体的な断りメールの構成

本研究は、宮崎(2007)を基にして、メールの構成を「開始部」「主要部」「終了部」に分類する。また、今回の調査に現れたデータを踏まえて、3つの構成を更に分ける。開始部では、「宛名」「挨拶」「話題導入」、主要部では、「断りの前置き」「理由」「断り」「断りの結び」、終了部では、「終了時の挨拶」と「署名」に分けられる。

(3) 構成の型

意味公式と全体的な構成の間を繋げる概念として「断りメールの構成の型」(以下、構成の型)を設定する。本研究では、意味公式の機能と全体的な断りメールの構成を踏まえて、全体的な断りメールの構成を更に分類し、構成の型を設定する。従って、本研究における「断りメールの構成」とは全体的な断りの構成に留まらず、比較的詳しく分類した構成の型を基にしたものである。

表2 構成の型の設定方法

意味公式：	全体的な断りメールの構成	+	意味公式の機能	=	構成の型
●連絡のお礼：	話題導入	+	積極的な話題導入	=	話題導入の積極型
●話題の切り出し：	話題導入	+	中立的な話題導入	=	話題導入の中立型

また、同様な断りメールの構成と意味公式の機能を同じ構成の型としてグループにした。例えば、連絡のお礼、肯定的な表現、共感という意味公式は「話題導入の積極型」にする。

例1 意味公式と断りメールの構成の分析 (JJのデータ、対先生)

鈴木先生 (A 宛名：宛名⁽¹²⁾)

ご連絡有り難うございます。(D 連絡のお礼：話題導入の積極型) よさこい踊りに参加したかったのですが、(I 願望：断りの前置きの積極型) クラブの合宿があります。(N 明確な理由：明確型) せっかくですが、(L2 残念：断り表現の前置き) 今回の参加は難しいかと思います。(P 婉曲的不可表現：断り表現) 周りの友達で、参加出来る人がいないか私からも声をかけてみますね。(Q 代案：断りの結びの積極型)

6.断りメールの結果と考察

6.1 断りメールの構成と意味公式における JJ と TJ の共通点と相違点

6.1.1 JJ と TJ との共通点

(1) 依頼者の地位に関わらず、「関係を維持する機能を持つ構成 → 理由の明確型(メールの中心部) → 関係を維持する機能を持つ構成」のような構成を多用している。親しい人に断る際に明確な理由のみならず、段階的に関係を維持する構成が必要だと考えられる。

例2 JJ と TJ が共通している断りメールの構成 (TJ のデータ、対友達) ⁽¹³⁾

誘ってくれて、ありがとうね。(D話題導入の積極型：積極的な関係維持)

↓
1月9から11日にはクラブと合宿の予定がある。(O明確な理由：理由の説明) = メールを中心部

↓
でも、当日には何かの私ができることがあったら、遠慮なく言ってね。(Q断りの結びの積極型：関係の維持)

(2) 意味公式では、両場面で、JJ と TJ とともに話題導入の積極型における「連絡のお礼」、断りの前置きの積極型における「願望」、断りの結びの積極型における「代案」を多用している。

6.1.2 JJ と TJ の間の顕著な相違点

(1) 先生と友達の場面で見られる相違点

- ① JJ は比較的に「断り表現」をよく使用しているが、TJ はあまり使用していない。
- ② TJ は JJ で見られない「次回への意志表現」を使用している。

(2) 先生の場面のみで見られる相違点

- ① JJ は比較的に断り表現の前置きを良く使用しているが、TJ は一切使用していない。
- ② TJ の「終了時の挨拶の話題関連型」の使用率は比較的に少ない。

6.2 依頼者の地位からの影響

ここでは、JJ・TJ のデータを対象とし、依頼者の社会的な地位の相違がどのように断りメールの構成と意味公式に影響を表しているかについて述べる。

6.2.1 JJ と TJ との共通点 ⁽¹⁴⁾

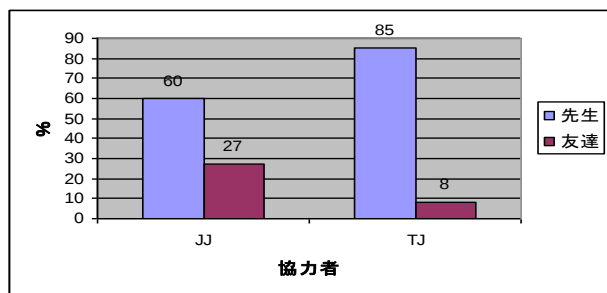


図1 構成「挨拶」の使用率

図1によって JJ と TJ とともに友達の場合より先生の場合によく「挨拶」の構成を使用している結果が得られた。両グループは先生に対して、礼儀正しさを示すことを大事にしていると考えられる。

6.2.2 JJ と TJ の間の顕著な相違点

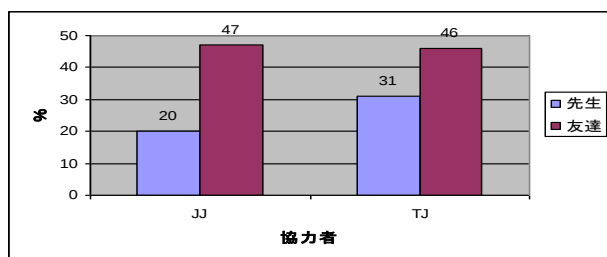


図2 意味公式「肯定的な表現」の使用率

図2によって JJ は依頼者の社会的な地位によって、話題導入の積極型における「肯定的な表現」の使用率が異なる傾向が見られる。JJ では、友達の方が自分の気持ちを表す「楽しそうね」などの肯定的な表現を言いやすいと推測できる。それに対して TJ では、顕著な差がない。

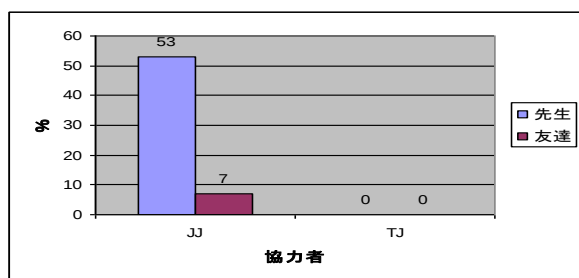


図3 構成「断り表現の前置き」の使用率

例3 JJの断り方の使い分け

先生の場合	友達の場合
私は1月9日～11日までクラブの合宿があるんです。 (理由の明確型) 本当に残念ですが、 <u>(断り表現の前置き)</u> 今回は参加できなさそうです。 <u>(断り表現)</u>	私は私9日から11日までクラブの合宿で神戸に行くから、 (理由の明確型) <u>無理やわ。</u> <u>(断り表現)</u>

上記によって、依頼者の社会的な地位に応じて、TJは挨拶という構成を調整する傾向が見られる。しかし、JJで見られる友達の場合における「肯定的な表現」の多用及び、先生の場合における断りの和らげという調整はTJで見られない。

6.3 学習者の言語形式

ここでは、まず、比較のベースラインデータとして目標言語のデータであるJJと学習者の母語のデータであるTTを比較してから、「語用的転移」「アコモデーション」「学習特有の言語形式」という3つの観点から、TJを分析する。

6.3.1 断りメールにおけるJJとTTとの相違点

(1) 構成においてJJは「話題導入」「話題導入の積極型」「終了時の挨拶」「終了時の挨拶の話題関連型」を多用しているが、TTはそれらの構成をあまり使用していない。

(2) 意味公式においてJJは話題導入の積極型における「連絡のお礼」を比較的に多く使用している。また、TTはJJが使用していない「次回への意志表現」を使用している。

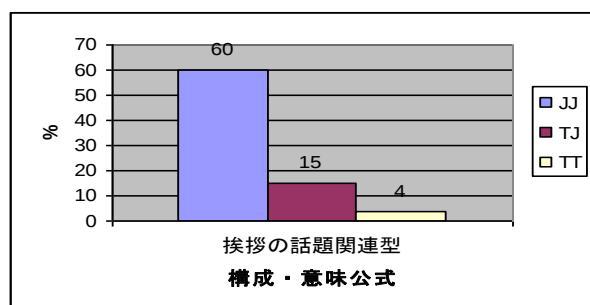
6.3.2 語用的転移⁽¹⁵⁾

図4 構成・意味公式「終了時の挨拶の話題関連型」の使用率 (対先生)

図3で述べた数字を踏まえて、JJは先生の場合に断り表現の前置きを比較的によく使用していると分かった。これによって、JJは先生に対する断りに丁寧さを表すために、「断り表現の前置き+断り表現」という柔らかい断り方を選択すると考えられる。一方、TJは両場面において断り表現の使用率が少なく、断り表現の前置きの使用も見られない。

図4から、TJは先生に対して、「終了時の挨拶の話題関連型」の使用率が比較的に低いと分かった。タイ語では挨拶の話題関連型を使用しないため、この現象は母語であるTTからの影響を受けているのではないかと考えられる。

また、意味公式において、JJは一切「次回への意志表現」を使用していないのに対して、TJはTTから影響を受けた「次回への意志表現」を使用する傾向が見られる。

6.3.3 アコモデーション⁽¹⁶⁾

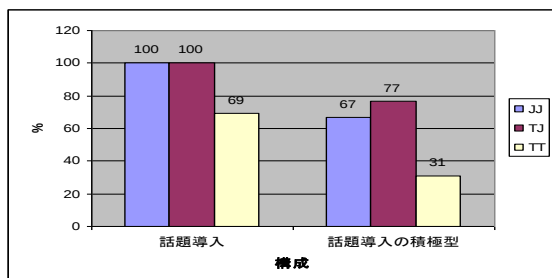


図5 構成「話題導入、話題導入の積極型」の使用率 (対先生)

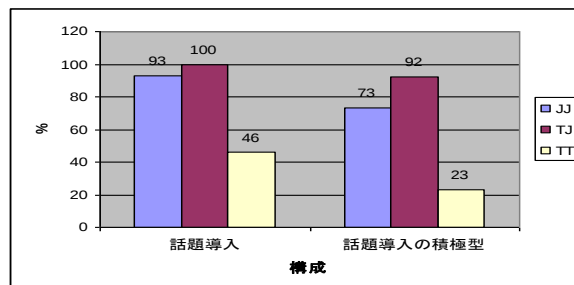


図6 構成「話題導入、話題導入の積極型」の使用率 (対友達)

図5と図6によるとTJでは先生の場合と友達の場合のいずれも「話題導入」と「話題導入の積極型」という構成のアコモデーションがある。

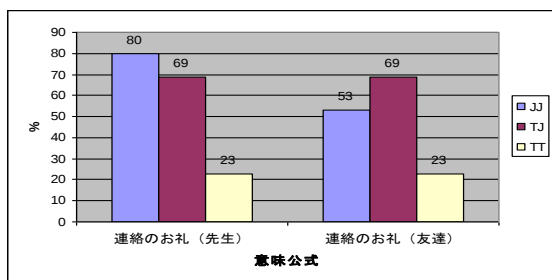


図7 意味公式「連絡のお礼」の使用率

図7で述べたように、意味公式では、両場面における「連絡のお礼」の使用率はJJに近づく傾向が見られ、アコモデーションの傾向として考えられる。

タイ語では、「話題導入の積極型」と「終了時の挨拶の話題関連型」の使用率が少ない。そこで、TJが「話題導入」「話題導入の積極型」「連絡のお礼」「終了時の挨拶の話題関連型」をJJにアコモデーションをすることは、先に述べたTTの使用率が少ないことと関連があると考えられる。

6.3.4 学習者特有の言語形式⁽¹⁷⁾

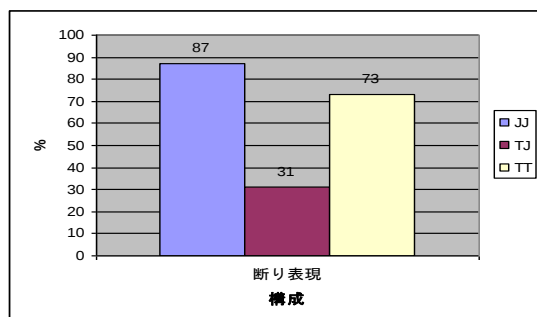


図8 構成「断り」の使用率 (対先生)

図8から、JJとTTは比較的高い割合で、「断り」を使用しているのに対してTJは31%しか使用していない。TJの断りを回避する傾向は学習者特有の言語形式と考えられる。日本社会が言わない社会だと言われているため、学習者がはっきり断り表現を言わないようにするのはないかと考えられる。

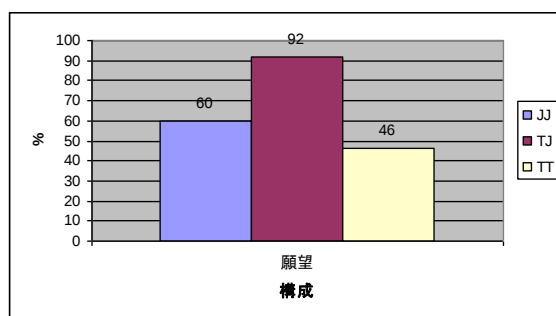


図9によって、TJの友達の場合では、「願望」の使用率はJJとTTより非常に高いため、学習者特有の言語形式として考えられる。

図9 意味公式「願望」の使用率(対友達)

上記によって、目標言語のデータであるJJと母語のデータであるTTを踏まえて、構成でも意味公式でも「語用的転移」、「アコモデーション」、「学習者特有の言語形式」という言語形式が確認できた。語用的転移は、TJの「終了時の挨拶の話題関連型」の不使用および、「次回への意志表現」において観察された。さらに、目標言語に近づけているアコモデーション傾向も確認された。それらは、「話題導入」、「話題導入の積極型」という構成と、「連絡のお礼」という意味公式である。学習者特有の言語形式はTJは断り表現を使用しない構成に見られる。また、意味公式では「願望」の多用は学習者特有言語形式の傾向として考えられる。

7. まとめ

本研究では、親しい先生・友達からの依頼に対する断りメールの構成における断り方の共通点と相違点が明らかになった。学習者の語用論的能力は、依頼者の社会的な地位に応じた断りメールの書き方の調整及び、学習者が使用した言語形式という観点から分析をした。依頼者の社会的な地位に関しては、TJはJJと比較して依頼者の上下に応じた断り方の調整が少ないが、挨拶という構成を調整していると検証された。また、「語用的転移」「アコモデーション」「学習者特有の言語形式」という観点を使用し、学習者の言語形式を分析した。「語用的転移」が比較的少なく、学習者が能動的に選択した「アコモデーション」及び、「学習者特有の言語形式」の方がよく見られることが分かった。

今回の対象者は女性しかないので、偏りがあるかもしれない。その点については今後の課題にする。

注

- (1) 留学経験があるグループの結果はワラシー (2011)参考
- (2) 本研究では、「メール」はパソコンメールのみを対象とする。

-
- (3) 本研究では、断りとは「相手の依頼に対して承諾できないことを決定し、人間関係を維持しながら、依頼者にその旨を伝えること」である。また、断りメールとは「パソコンによるメールのやり取りを通して『断り』を伝えること」である。
 - (4) 語用論は言語を社会的な側面から見て、実際に言葉を使う状況や場面、相手との人間関係に照らした適切さに注目している。
 - (5) 発話行為は Austin と Searle によって発展された概要である。Austin は発話行為理論を「発話することは行動になり得る (to say something is to do something)」と提唱した。
(Austin1962:12)。
 - (6) 前者は選択する言語形式により意図されている発話行為を遂行する領域で、後者はその行為を社会文脈における適切性に関する領域である。
 - (7) 全グループは女性で、27 歳以下の協力者を対象とした。
 - (8) 全員は同じ大学に在学し、平均的な日本語学習期間は 6 年、旧日本語能力試験 2 級に合格し、日本での滞在経験は 2 ヶ月以下に限定する。
 - (9) 中間言語語用論能力に関する研究では、教室外の日常生活でも使用されている第二言語環境と教室以外ではほとんど目標言語の母語話者と接触のない外国語環境を区別する
(清水 2009)。
 - (10) 目上であり、礼儀正しさを守る必要がある先生と、地位が同等だが気持ちに配慮を払う必要がある友達に対してどのように断り方を使い分ければ適切かという疑問を抱える日本語学習者が多いと思われる。そこで、本研究では、依頼者の社会的地位という要因に注目し、親しい先生・友達に対する断りを扱う。
 - (11) 『日本語の E メール書き方』では「イベントへの協力を断る」の場面は学生の生活の身近な場面として挙げられている。従って本研究では、「大学祭のよさこい踊りに参加してもらいたい」という依頼メールを設定した。
 - (12) (A:B) では、A は意味公式を表し、B は断りメールの構成を表している。
 - (13) 誤用は原文のままである。(A:B では、A は断りの意味公式を表し、B は意味公式の機能を表している。)
 - (14) 依頼者である先生と友達からの依頼を断る時に、同じ構成・意味公式の使用率は 25%以上差がある場合は、依頼者の地位からの影響とみなす。
 - (15) TJ は JJ の言語形式と 25%以上差があり、TT と 15%以下の差がある場合は「語用的転移とみなす。

- (16) TJ と TT の使用率が 25%以上、TJ と JJ の差が 15%以内の場合は「アコモデーション」とする。
- (17) TJ の使用率は JJ と TT に比較すると、25%差がある場合は「学習者特有の言語形式」とみなす。

参考文献

- 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー:『断り』という発話行為について」『日本語教育』第79号、pp41-52
- 太田一郎(2001)「パソコン・メールとケータイ・メール「メールの形」からの分析」『日本語学』第20号、pp44-53
- 清水崇文(2009)『中間言語語用論概要－第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- 藤浦五月(2007)「日本人と韓国人の「断り」行動比較」『比較文化研究』第78号、pp1-10
- 藤原智栄美(2004)「日本語話者とインドネシア語話者の『断り』に関する研究」大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文
- 宮崎玲子(2007)「電子メールにおける依頼の展開構造－日本語母語話者とタイ人日本語学習者の対象研究－」『日本語・日本文化研究』第17号、pp175-184
- ワラシー クンランパー(2011)「タイ人日本語学習者の語用論的能力の分析－親しい先生からの依頼に対する断りメールの構成に注目して－」『日本語教育』第149号、pp40
- 築晶子、大木理恵、小松由佳(2004)『日本語 E メールの書き方』The Japan Times.
- Bachman,L.&Palmer,A.(1996).*Language tesing in practice*.Oxford: Oxford University Press.
- Beebe,L.Takahashi,T.&Uliss-Weltz,R.(1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In.Scarcella,E. In.Scarcella,E.Andersen,&S.Kristen.(Eds.),*Developing communicative competence in second language*. Rowley,MA:Newbury House. pp55-73
- Kasper,G.&Blum-Kullka,S.(1993). Interlanguage pragmatics:Introduction. In G.Kasper& Blum-Kulka,S.(Eds.),*Interlanguage pragmatics*. Oxford:Oxford University Press.pp3-17
- Kasper,G.(1997).The role of pragmatics in language teacher education. In K.Bardovi-Harlig& B.Hartfort (Eds.),*Beyond methods:Components of second language teacher education*. New York: MCGraw-Hill College. pp113-136
- Leech,G.N.(1983). *Principle of pragmatics*.London:Longman.
- Thomas.(1983).Cross-cultural pramcatic failure.*Applied Linguistics*,4,pp91-112

